

いま、表現力をどう育てるか

——「ことばの力」を問い直す——

黒瀬直美

一 はじめに

「それははなはだしいなあ。」授業中に生徒とのやりとりの中で、この言葉を使ったとき、生徒の表情が一瞬止まった。「あれ？・・・もしかして、「はなはだしい」という意味がわからないんだらうか。」と疑問が湧き起こる。「はなはだしい」って・・・わかる？」と念のため、尋ねると、「さあ・・・使ったことないからわかりません。」という答えが返ってくる。

現在の勤務校は、学力的にはごく「普通」の、中の中の高校生が通ってきている。素直で明るく、学校生活に適度に適応し、ほどほど勉強し、迫り来る受験の焦りもさほど感じず、のんびりと高校生活を楽しんでいる。毎日そんな「普通」の高校生を目の前にして授業をし、言葉のやりとりをしていると、彼らの語彙の少なさに驚くことが年々多くなってきた。

これは統計を取ったわけでもないのに、単なる感覚でしかないの

だが、年々確実に生徒の語彙力は低下していると思う。漢字テストを実施しても、少しランクが上がると、正解率は下がってしまう。作文を書かせても、小学校高学年程度と思われるような内容のものを数多く目にするようになってきた。確実に「ことばの力」は低下しているのだ。

原因は色々考えられる。ゆとり教育の弊害、活字離れ、漫画世代、テレビ世代などなど、時代のめまぐるしい変化が関わっているのは確実であろう。個人的には、映像文化世代というのが特に大きな要因だと思っている。彼らは言葉ともみ合いながら、格闘しながら考えようとはしない。言葉とまみれるのは苦痛を感じるようである。映像で視覚的に刺激を受けて、感覚で理解する方が楽なのではないだろうか。

そのような時代に生きる生徒たちに対して、どうやって言葉で考え、表現する力つけさせていけばいいのか、日々の実践の切れ端を集め、振り返り、考察してみたい。

二 国語総合における表現指導

国語総合は高校一年生を対象に、現代文、古文、漢文を扱い、理解領域はもちろんのこと、表現領域にも力を入れて、指導することが求められている。本校でも、表現の指導はシラバスに明記され、国語総合の採用教科書にも表現指導の項目が節目ごとに用意されている。

国語総合を担当して真面目にこの表現指導に取り組んではみても、理解領域の指導とは全く別のところで、表現指導の項目が立っている教科書であったため、唐突に生徒に表現指導を行うような形になってしまった。

例えば、評論文の学習の後で、「説明文を書く」という指導を評論文の学習の事後に関連づけて扱うことにしていたことがあった。しかし、評論文の教材は複雑な内容であったため、それに関連づけて説明文を書くというような指導方法が不適當であった。断念して教科書の表現指導の内容の通りに行ったが、なぜここで説明文を書かなければならないのか、生徒の側に、内的な動機付けが存在するはずもなく、生徒の興味関心とずれた指導になってしまった。また、説明文を書くための、取材の時間も十分に取れず、(生徒の自主性に任せて家庭学習で取材をしてくるという取り組みは難しい状況であった)表現の指導は、ただやっただけの、空虚なものになってしまったという苦い経験をした。

シラバスを作成する段階で、扱う教材の内容と有機的に結びつく

表現指導を取り入れなければ、生徒の側にも書くべき内容が蓄積されず、テーマだけ空しく与えられ、しぶしぶ義務的に書かされるものになる。また、限られた時間の中で、表現指導を行うのなら、理解領域で扱う教材を「取材」の位置づけにして、表現指導を行うなどの工夫も必要だ。このあたりは、教科書というものが、各学校の実態に合わせたものではなく、あくまでも、「典型」という存在にしかなりえないという限界があるのであれば、教科書の指導項目にとらわれない、指導者の柔軟な対応が求められるべきであり、もっといえば、指導者個人の工夫に頼る部分も大きいと言えよう。

三 構造図を書かせる指導

以上のような反省を元に、表現指導は生徒実態に合わせて、教科書教材と有機的に関連したところで行うべきだと、今更ながら強く認識した。そこで、次年度、二年生の現代文で、それを実践してみようと思ったものの、二単位の授業では、表現指導も時間数の関係で取れない状況になった。シラバスによって、進度が計画され、その計画で着々と授業をこなしているうちに、時間は流れてしまった。それでも進み具合を調整して、三学期に取り組むことにしたのは「衣服という社会」(第一学習社 現代文)という教材の指導の中であつた。

この評論文の内容は本校の生徒の実態にしては、かなり難しいものであつた。論理展開もやや複雑で、わかりやすいものではなかつた。内容理解だけでも、骨が折れるものであつた。しかし、私の講

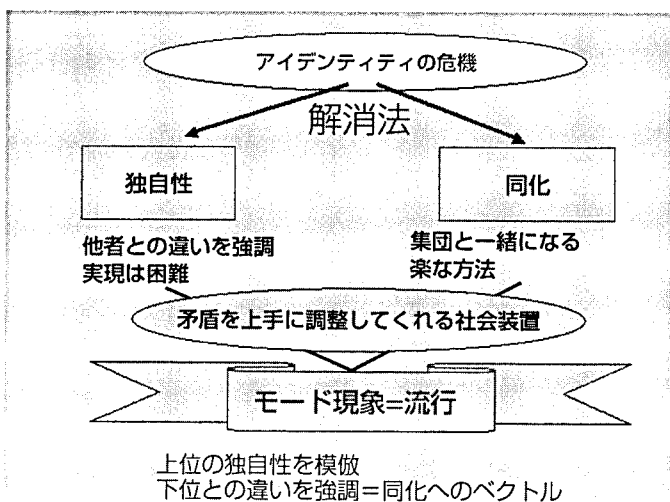
義中心の授業になるのを避けたいと思ひ、構造図を書かせることにした。

構造図の良い点は、図式化しながら論理の展開を考えていくことができる点と、作文のような文章になくても、表現しながら理解が進むと言うこと、映像文化世代の彼らにとつては、図式化することに抵抗はなく、むしろおもしろがって取り組むということ、さらに、構造図は他人にも示しやすく、見られることを意識して作成するため、他人にわかりやすく書こうとする意識が自然に働くと言うことである。

構造図作成はモデルの構造図(資料1・後掲参照)を示し、書き方を説明して、個人個人で取り組ませた。教材の内容が難しかったにも関わらず、生徒は真面目に取り組み、難解な言葉と格闘していた。熱心に本文を読む生徒、あれこれと図表を工夫する生徒、下書きをする生徒など、こちらが驚くほど熱心に取り組んでいた。その原因は、事前に、できばえの良い作品をパワーポイントにして、クラスの前でプレゼンテーションを行うという予告をしたからではないか。

他人に評価されるという意識と、パワーポイントというソフトによって構造図が作品となるという魅力が彼らの意欲をかき立てたのだと思われる。

クラスで代表二人の作品を私がパワーポイントにして、提示して見せた。スクリーンに動的な文字が動き、説明を始めると、生徒たちの目は輝いた。「わかりやすい」「自分もやってみたい」という声が聞かれた。



思いつきでやった取り組みであるが、構造図を書かせ、パワーポイントにして、プレゼンテーションを行うと、話し方の指導にもなるであろうし、またこの後で、さらに筆者の意見を要約するという指導も可能であろう。

この指導はいわゆる「表現指導」とはいえないのかもしれないが、情報教育との関連、話し方指導との組み合わせなど、さまざまな広がりを持っている方法ではないか。生徒の興味関心の度合いも高く、今後この方向でも指導を深めていきたい。

四 リレー作文

とにかく表現指導は読解教材との組み合わせで有機的に行った方がいいということをしひしと感じた私は、教材を扱うたびに、これをどう表現指導にもっていくかを考えるようになった。しかし思いついても、時間が無くて断念することが多いのであるが、どうしても扱いたくなつたのは、「高瀬舟」の学習後に「喜助の弟殺しは是か非か」というタイトルで作文を書かせるといふものである。これは毎回、意見が分かれたりして、生徒自身かなり揺さぶられるテーマであるからだ。

指導方法を考えている時に、ふと、即時的に反応が返ってくるインターネット掲示板(下図参照)の事を思い出し、掲示板機能は討論会に向いているのではないか、と思いついた。書き込んで反応が返ってきてまた返信するたびに考えが深まる……。この機能を授業で使えば、「弟殺し是非論」も盛り上がるのではないかと思つたのである。

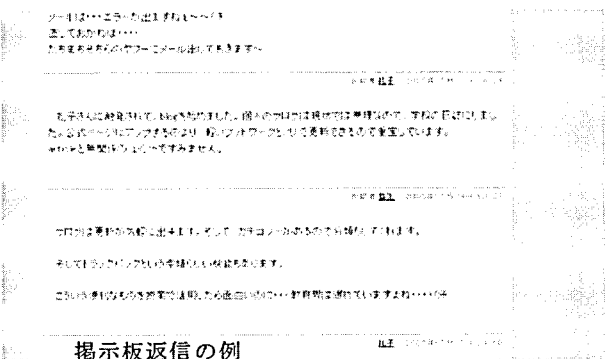
しかしながら、四〇人全体が一つの掲示板にアクセスするとなると、大きな負荷がかかり、サーバーがダウンしてしまう恐れもあるのではないかと考え、他の方法を探しているうちに、紙の上でこれ

をやったらどうだろうかと思いついた。そこで作成したのが、リレー方式の作文用紙である。

資料2(後掲参照)のプリントを全員に配布し、まず自分の意見を書き込む。その後、後ろの席の人にそのプリントを回し、返事を書いてもらう。制限時間を5分と決め、その時間内でまとめるように事前に予告しておく。5分経ったらまたその後ろの座席の人に回し、また5分経ったらその

後ろの人に・・・というようにリレー形式で書いてもらう。すると、生徒は自分とは違った視点の他人の意見も触れ、自分の考えを揺さぶられ、さらに返事を書くために深く考えることになる。これを書いている間は、大変に集中している。

5分という制限時間を設けたせいか、とにかく理由を付けて何かを書かなければならない状況になるからであらう。また友人に対して、失礼にならないように、ある程度の内容を盛り込まなくてはならないと彼らは思



掲示板返信の例

い、一生懸命に考えを絞り出していった。

「人を読むとなんか引きずられるよー。」「○○さんがこんな事書いている。すごい。」など、生徒の生き生きとした反応も見受けられた。喜助に同情的な意見を書いている生徒も、情に流されずに法的な根拠を持ち出して意見を書いている生徒の意見に触れて、自分の意見を引きずられ、また、自分の論拠の稚拙さを自覚して、何とか説得力のある意見に仕立てようとする努力をする生徒もあり、授業は活気づいた。

リレー作文の良い点は、即時にコメントが付けられ、いろいろな人の考えを短い時間で閲覧できるところと、集中して考えを絞り出す訓練になること、である。欠点としては、自分の書いた文章に対する他人の考えは、四、五人回ってからでしか見ることができない点と、座席の同じ列に同じ考えの人ばかりがいると作文に深み生まれにくいという点であった。

今回は紙上で行ったが、今後はディベートなどにも展開できる可能性のある取り組みであった。そして、将来的にはインターネットの掲示板でこれを議論するようにいき、即時に返事が返って来て、その記録も残るという掲示板機能を十分に活用した授業を行いたいと思っている。

五 マンツーマン小論文指導

授業以外での表現指導では、近年推薦入試で小論文を課す大学が多くなり、当然現場にいる私たちも小論文指導に取り組むことが多

くなった。こちらの方ではマンツーマンの形を取り、丁寧に助言や添削も行い、きめ細かく指導ができる。毎年指導するたびに思うのだが、指導していくに従って生徒が伸びていくのを見ることができ、こちらとしても大変手応えのある指導である。

昨年度、三月の中旬になって、一、二年生時担任していたある女子生徒が私の研究室にやってきた。「先生、受験した学校全部落ちました。もう残っているのは後期試験しかないんです。後期試験には苦手な小論文があるんですが、指導してもらえないでしょうか。」彼女は一年生の時から進路に悩み、「何になりたいか、何をしたいのかがわからない」「文系、理系、どっちにすすんだらいいのかわからない」など、進路については悩んではいるものの、だからといって体験入学に参加するような主体性もなく、作文の時間になると「書くことがない・・・。」と真っ白な原稿用紙の前で一時間もじっとしている生徒であった。素直で明るく、従順で、やらなければならぬことはきちんとやってくるのであるが、主体性に乏しく、自分から深く考えようとする姿勢に乏しい傾向があった。三年生になって担任ではなくなったが、総合的な学習の時間を受け持ち、レポートを書くことになっても、非常に重々しい表情で、レポート用紙とにらめっこし、筆が進まない状態であった。

その重々しさは、書くことがないという自分へのいらだちにも見えたが、書くことが湧きあがるものでないと、書けないのだから、無理にこの時間に書かせようとしなくて欲しいといった抵抗のようにもみえた。私の一方的な見方になるが、彼女のように、書かなければならないものに対して挑んでいく探求心と行動力、主体性のな

さを感じ、もつといえ、そこまでやろうとしない「甘え」のようなものを感じていたのだ。その彼女がいま苦手な小論文指導を受けたいと希望してきている。それも、もう後がないという切羽詰まった状況で、なのだ。

「人が半年とか、三ヶ月とかかけて小論文の力を身につけていくところを、二週間でやろうとしているんよ。人生最大の努力をしないとだめよ。」先生、私は進路を決めるのも遅かったし、勉強を始めるのも遅かったんです。でもやっと自分のやりたいことが見つかった。なのでどうしてもこの進路に進みたいです。」

彼女の真剣な思いを信じて、指導を始めたのだが、土日でもやってくるべき課題があまりにもお粗末だったのに私は非常に落胆してしまい、彼女に対して思っていたことをストレートに打ち明けた。

「書けない、書けないっていうけど、書こうとすることがらに對してどれぐらい調べた？一のことを書こうとするのに、十は調べて、九は捨てるぐらいの調べ方でないと、いいものは書けないんよ。この土日、時間はたっぷりあった。一日十時間は軽く確保できるでしょう。ましてや、人生がかかっているこの局面で、どうしてそれぐらいの調べ方しかやってないん？甘いんじゃないの？進路が決まらなかつたときもそうだし、総合的な学習の時間の時もそうだったけど、自分からものすごいエネルギーを注いで生きていないと、書きたいこと、やりたいことはなかなかわき上がってこない。あなたはその時真剣に考えながら、生きてきたの？本当にあれこれ調べたり、行動したりして生きてきたの？甘えた状態は今も昔も変わらないじゃないの。生き方が出るんよ、作文には。この入試ではそ

れが問われているんよ。」

涙をばらはら流しながら、それを聞いていた彼女であった。自分の甘さを思い知らされたのか、そのことをきつかけに彼女の猛勉強は始まった。書いてくる作文はまだまだたななかつたが、内容は明らかに変化していた。取材に丁寧に時間をかけ、構想ノートを作り、十分な準備をして、一文一文丁寧に書いて持ってきた。作文が整うのに時間はかからなかつた。もともと持っていた聡明さが、努力の上に次第に花開いていったようであった。

毎日毎日、作文を点検し、助言し、添削し、彼女はそれを受けて何度も書き直してきた。ある時、彼女の下書きを見せてもらったが、何枚も何枚もメモをとり、インターネットの検索資料にもアンダーラインを引いて、ファイルしてまとめていた。どんなタイトルが出ても良いように、いろいろな題を与えて書かせたが、二週間という短い期間で、素晴らしい伸びを見せた。本番の試験三日前には、小さなノートに、各テーマごとに骨子を書いたメモを書き入れ、それを何度も見直してどういうテーマを与えられても対応できるようにしていた。

入学試験の結果は見事第一志望合格。努力が実り、彼女も大変にうれしそうであった。このような濃密な指導ができたのも、私と彼女の人間関係が土台にあつてこそだったのかもしれない。一年生の時に悩みを相談しに來たり、進路の相談を折に触れてしたり、二年生では病氣のお父さんを抱えた家族のしんどさを打ち明けに來たり……私の方も、人間関係があつたからこそ、厳しいことを迷い無く言うことができたし、また彼女も信頼してそれを素直に受け

止めることができたのだ。

卒業していった彼女は大学生活でも作文は苦痛ではなく、むしろ得意だと思ふようになったという。指導者としても幸福な指導をさせてもらったとつくづく思う。

授業は生徒四十人対指導者一人。書かせっぱなしになりがちで、効果的な指導は非常に難しい状況であるが、個別指導になると、かなりきめ細かく指導ができる。この個別指導の良い点をどうやって一斉授業に取り入れていくかが大きな課題ではないだろうか。人的配置がもつとも求められる課題であるが、現状では難しい。指導する側のアイデアや工夫で、この点を補うことはできないものか、頭を悩ませる問題だ。

六 おわりに

日々の実践の切れ端をかき集めて報告してみたが、私なりに「どう表現力を育てるか」という投げかけに対して、今まで述べてきたことを元にとまとめてみた。

(1) 自明のことであるが、表現する以前にそのテーマに対しての「理解」が深まっていなければ、生徒の文章はその場しのぎの上滑りしたものになる。「理解」(＝読む、聞く)の指導過程と有機的に関連した表現のテーマを与えることを常に考えて授業を行うべきだ。逆に言えば、常に表現分野を意識しながら理解の指導を計画するということを、年間計画の中で取り入れていなければならぬ。

(2) 表現指導というと作文がメインになりがちであるが、生徒は新しいものに敏感である。情報のスキルとも関連させ、パワーポイントによる構造図作成およびプレゼンテーション、ホームページ作成、インターネットの掲示板機能を使った掲示板討論会、授業での感想、記録をまとめるブログの作成など、情報分野との関連によって、生徒の興味関心を喚起するとともに、情報社会で必要な表現力を育成していくことも積極的に取り入れていくことが必要ではないか。新しい分野で自分はどういうことができるのか、自分の可能性を試したくなる魅力ある方向であるだけに、生徒は「何かを伝えたい」「新しいことに取り組んで、自分の可能性を広げたい」という意欲を持って取り組み、その意欲を持って表現していくうちに、ことばを習得していくのではないだろうか。

(3) より効果的な指導は、少数数での表現指導であるが、四十人一斉授業であっても効果を上げる方法はないか、常に模索していく必要がある。そのためには、指導者が常に問題意識を持つておく必要がある。またそのような効果的な指導方法の工夫を広めるような指導者の情報交換の場も必要である。

(4) 生徒に対して迫る厳しさも必要である。主体的に調べ、表現するということで得られる充実感を味わっていない生徒が多いのではないか。そのような経験を経て、表現することへの魅力を感じ、次の取り組みへの動機付けともなる。逆に言えば、指導者側は生徒にそのような経験をさせ得ていないともいえる。時には生徒に徹底して取り組ませ、達成感を持たせる指導を

我々が情熱をもって行うことが必要なのではないか。そのためにも、日頃からの生徒との人間関係を大事にしておくことは、

大前提であると感じた。

このように考察してみたが、いずれにしても、指導者の研究、工夫、情熱、などなど、自らの実践を常に問われていることに他ならない。現場の状況は年々多忙を極め、生徒一人一人に余裕を持って関わる時間も激減してしまった。常にことばの力を育てるという意識を保持しながら、生徒との関わりを多く持ち、時代とともに変化していく生徒の実態と柔軟に対応していきたいものである。

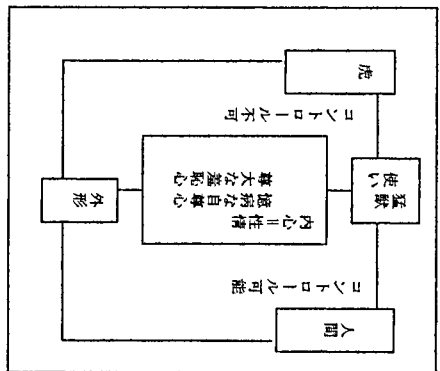
2 年 現代文 衣服という社会 構造図

年 組

番名前 ()

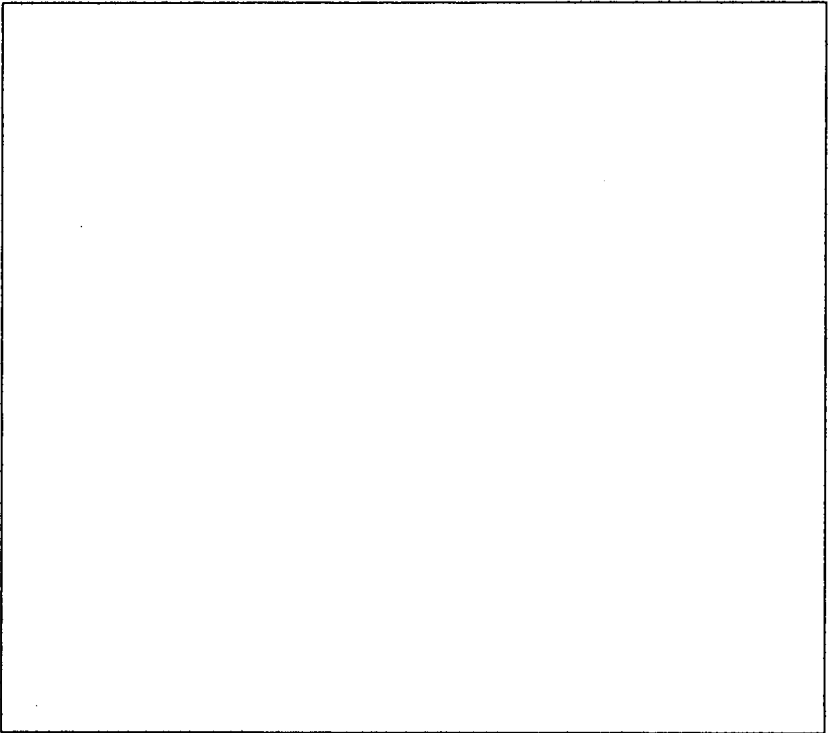
■ 構造図とは 文章の論理的な理解のために論理構造を図式化したもの
文章に用いられた言葉に基づいての説明をする

(例)



自分の理解のため
人にも簡単にわかりやすく示すため
キリワード・ポイントとなる語句を
よく選んで書く
多すぎても少なすぎてもわかりにく
くなる
最初から上手に書くと思わずに下
書きなどをするとい

■ 衣服という社会を構造化してみよう。(出題番号1、2の1ははじめのp98・3行目までの部分、出題番号21、40はp98・5行目から終わりまでとする)



資料 2

三年現代文 高瀬舟 レポート

年 組 番 名 前

】

【 補助線を引いたのは異なるのが、書き変えている。】

自分の考え 第二回め 友人 () S 考 え	友人 () S 考 え	友人 () S 考 え	友人 () S 考 え
----------------------------	--------------	--------------	--------------

自分の考え 第二回め

(2) 高瀬舟を学習して、持っているかどうかを考えたい。必書して欲しい。

[Empty box for student response]